

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：40127

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K13472

研究課題名（和文）児童養護施設における保育士の力量形成過程に関する研究

研究課題名（英文）The Process of Building the Competence of Nursery Teachers in Children's Home

研究代表者

崔 敏奎（CHOI, MinGyu）

旭川市立大学短期大学部・その他部局等・准教授

研究者番号：00844911

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は保育士養成校から保育士資格を取得し児童養護施設に8年以上勤務している保育士を対象に子どもとの関わりにおいてどのような経験をし、そこからどのような力量を形成したのかの具体的なプロセスの様相を明らかにしている。新任の際には子どもとの関係から必死になるが、卒園児との関わりや続けることにより子どもに認められることから新任から中堅という自覚をする。そして、中堅の際には子どもに対する注意する方法を身に付ける力量を形成する。現在にいたる力量としては自分なりの保育士像を形成することが明らかになった。また、この一連のプロセスではインフォーマル関係を構築することから保育士を支えられたことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義としては児童養護施設の保育士（対人支援の専門職）の経験と力量を成人教育の視点から具体的なプロセスの様子を解明しているところにある。社会的意義としては3つ挙げられる。1つ目は、子どもとの関わりにおける児童養護施設の保育士の経験と力量を具体的に解明していることから、児童養護施設で保育士を希望している方や児童養護施設の関係者へ大きな示唆点を与えることができる。2つ目は、児童養護施設での保育士の離職率が高いという現実から児童養護施設の保育士を支える要因として「インフォーマル関係を構築する」ことを挙げている。3つ目は、保育士を養成する養成機関に対する具体的に議論すべき点を提示している。

研究成果の概要（英文）：This study focused on childcare workers who have obtained childcare worker qualifications from child's Home. What kind of experience do they have in interacting with children, and what kind of competencies have they developed from that experience? It clarifies the specific process of what happened. When he is newly appointed, he becomes desperate because of his relationship with the children, but from the time he is newly appointed, he realizes that he is mid-career because he is recognized by the children by interacting with the children who have graduated from kindergarten and by continuing to work there. Then, when they reach mid-career, they develop the ability to learn how to be careful with children. It has become clear that the current level of ability is to form your own image of a childcare worker. In addition, it became clear that this series of processes supported the childcare workers by building informal relationships.

研究分野：児童福祉

キーワード：児童養護施設 保育士の力量形成プロセス

1. 研究開始当初の背景

児童養護施設では、新型コロナウイルスの影響もあり感染予防のためのボランティアの控えや人材不足の課題を抱えているが、児童虐待やネグレクトなどによって施設で生活をしなければならぬ児童はさらに増えつつあるという問題も同時に抱えている。児童養護施設は社会から助けが求められている施設の中の一つであるが、人材不足の問題や過度な仕事の量などによって保育士を辞める人も実際に多数ある。本研究は、「このような現実においても児童養護施設での保育士としての仕事を辞めないで継続する理由とは何か」という素朴な問いから始まる。それは単純なやりがいの問題ではないと想定される。児童養護施設で保育士として働き始め、現在に至るまでの経験や現場で学んだこと、気づき等といった様々な要因こそが過度な現実においても保育士として継続していると想定される。その要因とは保育士として経験をすることにより形成された「力量」としてとらえることができる。人材不足という厳しい現状において、さらに、心に傷を持っている児童が増えつつあるという現状において、児童養護施設の保育士に必要とされる「力量」とはなにか。つまり、本研究の核心をなす問いとは、児童養護施設を8年以上継続して働いている保育士は児童養護施設で何を、どのようなことを学びながら専門家として「力量」を形成したのかである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、保育養成校で保育士の国家資格を取得して児童養護施設に8年以上勤務している保育士を対象に、子どもとの関わりにおけるどのような経験をし、その経験からどのような力量が形成されたのかを明らかにすることである。

本研究における研究対象者は、「8年以上」児童養護施設で勤務をしている保育士を対象としている。その理由として、まず、8年という基準については、児童養護施設の職員の勤続年数が7.7年であることや、全国児童養護施設協議会では、4年目から中堅としてとらえていること、そして実際に殆どの現場では多少の差はあるが、5年前後でリーダーといった何らかの役職が付くことから総合的に判断し本研究では8年以上を対象としている。

3. 研究の方法

本研究は3年の計画として行った。1年目である2021年度には、本研究における理論的検討を行った。2年目である2022年度にはインタビュー調査を行った。本研究の目的を遂行するための研究方法としては、インタビュー調査(半構造化面接方式)を取り入れた理由としては、「保育士の力量形成のプロセスにおける具体的な様相」を解明するのに適切であると判断したためである。インタビュー調査は、2022年6月から11月まで行い、インタビュー時間は研究協力者の勤務時間等を考慮し、60分から100分まで行うことができた。研究協力者には研究の目的や趣旨を十分説明をし、承諾を得た上で収録を行った。3年目である2023年度には、1年目で行った理論的検討と2年目で行ったインタビュー調査を基に分析を行い、論文としてまとめを行った。分析方法としては、まず、収録したものをデータとして逐語化し、その後、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTA)の分析手法に沿って分析を行った。分析手法としてM-GTAを採用した理由としては、M-GTAはインタビューの流れを全体的に把握することができ、ワークシートを用いながら概念を生成し、参加のプロセスにおける「相互関係性」を分析するのに適切であると判断をしたためである。

4. 研究成果

以下、「図1 児童養護施設における保育士の力量形成過程の構造化」は、「子どもとの関わりにおける保育士の経験と力量形成のプロセスの様相」を図としてまとめたものである。図1の表記の説明として、[]は保育士の経験と力量を表しているカテゴリーであり、【 】は保育士の力量形成過程における注目すべきコアカテゴリーを表している。そして、< >はカテゴリーとコアカテゴリーを構成している概念様相の表記である。 は保育士の力量の形成に影響を及ぼす経験であり、 は経験から形成された力量である。そして、矢印は概念やカテゴリーの相互関係性を表している。図を基に本研究の成果をまとめる。

保育士養成校(以下、養成校)から国家資格である保育士資格を取得して[児童養護施設で保育士として就職]をするということは24時間365日の勤務体制として<子どもの「生活」と「自立」の支援の場への参加>をすることであり、「生活」と「自立」の支援という<実践の場としての学びのスタート>が始まることである。しかし、新任保育士は、「生活」と「自立」の支援について養成校であまり学んできてないことから自分がどのように育ててきたのかを振り返りながら子どもの「生活」と「自立」の支援を行う実践を一から覚えることに【必死になる】。

新任保育士は<子どもの「生活」と「自立」の支援の場への参加>と<実践の場としての学びのスタート>といった[児童養護施設の保育士としての就職]をすることによって【必死になる】が、この【必死になる】ことは、<子どもとの関係>からさらに【必死になる】。具体的に、新任保育士が<言うこと聞かない>ことや新任保育士を<無視、なめてくる>、子どもから「暴言

を受ける、物を投げられる、叩かれる」といった[新任に対する子どもたちの言動]によって【必死になる】。この[新任に対する子どもたちの言動]は、新任保育士には<カルチャーショック>として受け止められ、これによって[子どもの背景が目に入らなくなる]。そして、ここから新任保育士は「仕事を辞めたい」といった気持ちが生じる。

では、新任保育士は[子どもの背景が目に入らなくなる]ほど<子どもとの関係>において【必死になる】ことをどのように対応していくのか。保育士は<先輩からのアドバイス>を受けながら子どもに対する[「注意」する方法を学ぶ]力量を形成していく。しかし、[「注意」する方法を学ぶ]力量は、単に先輩を<真似する>程度にとどまっており、子どもに対しての「注意」する本位には達していない。それによって新任保育士は自分の「注意」することに<戸惑いや抵抗感>を感じる。

子どもとの関係における新任保育士の【必死になる】ことはどのような経験を通して中堅保育士に繋がるのか。保育士が「自分はもう新任ではない、中堅である」と感じる時期を<中堅として自覚する時期3～5年>であると語っていた。新任保育士から3～5年の間に<余裕ができる>ことや<子どもとの関わりの変化>を感じるといった【中堅という自覚】をしていた。しかし、これは単に3～5年経つと自然に【中堅という自覚】をすることではない。保育士は【卒園児との関わり】を経験することから自分の中で<余裕ができる>ことを感じ、そこから【中堅という自覚】をしていた。つまり、新任保育士から中堅保育士に繋がるためにいかに卒園児と関わる環境を設けられるのが【中堅という自覚】をする上で大事となる。そして、【続けることにより子どもに認められる】ことも新任から中堅に繋がる大事な経験であった。新任保育士は【続けることにより子どもに認められる】経験をすることによって<子どもとの関係の変化>を感じ、そこから【中堅という自覚】をした。ここから、中堅となることは単なる時間の問題ではないことが分かる。

保育士は【中堅という自覚】をすることによって経験した<子どもとの関わりの変化>によって【「注意」する方法を身に付ける】力量と【子どもと一緒にすることをみつける】力量を形成していく。具体的に、まず、【「注意」する方法を身に付ける】力量は、子どもに「注意」が必要な際に子どものためにも保育士自身のためにもその場で解決するのではなく<時間を置く>ことや<感情的にならない、受け止める>、そして、子どものことを否定するのではなく、その問題行動やなぜその言動がダメなのかといった<行動や理由に焦点を置く>という中堅保育士としての【「注意」する方法を身に付ける】力量を形成していく。また、この力量を形成していくことによって<子どもに「注意」が通るようになる>といった経験をする。この【「注意」する方法を身に付ける】力量は、その場で解決するために子どもに積極的に向き合おうとしていた新任保育士の[「注意」する方法を学ぶ]力量とは対照的な様相として表れている。

また、【子どもと一緒にすることをみつける】力量は、子どもを主体として捉えて保育士は仲間という感覚から子どもと関わることを意味しており、この力量は特定の大人(保育士)との愛着や信頼関係が深まるプロセスとして捉えられる。

そして、[異動による一から学びなおし]も中堅保育士の経験として挙げられる。保育士は担当していたユニットから別のユニットへ異動となることによって<子どもとの関係>や<仕事の内容>から[異動による一から学びなおし]が生じそこから<戸惑い>を感じる。この中堅の際の異動という経験を中堅保育士は「年数が近い先輩などに助けられる」ことや[子どもと一緒にすることをみつける]ことから乗り越えていった。

【中堅という自覚】をすることによって形成していく【子どもとの関係性・信頼には時間がかかるという自覚】の力量も中堅の力量として挙げられる。この力量の特徴は、【中堅という自覚】をすることによって形成していく中堅の力量である【「注意」する方法を身に付ける】力量や[子どもと一緒にすることをみつける]力量が子どもとの関わりにおけるスキルを構成する「行動としての力量」であったら、【子どもとの関係性・信頼には時間がかかるという自覚】の力量は子どもとの関わりにおける保育士の「気づき」といった「意識としての力量」である。【子どもとの関係性・信頼には時間がかかるという自覚】をすることにより、保育士は子どもとの関係において積極的に向き合おうとしないで他の職員に助けを求めるなどの行動をするようになる。これは、子どもと関係性がまだ築いていなかったら関係性ができている職員に伝えて対応してもらうなど、児童養護施設は長い目で子どもを支援していく場であることを意識するようになる。

また、【中堅という自覚】をすることや【「注意」する方法を身に付ける】、【子どもとの関係性・信頼には時間がかかるという自覚】を形成していくことによって新任の際には入らなかった[子どもの背景が目に入る]ようになる。このようなプロセスを経て保育士は現在に至る力量として【児童養護施設で働く保育士像を構築する】力量を形成していく。

【児童養護施設で働く保育士像を構築する】力量は、子どもとの関わりにおいて児童養護施設で働く保育士は「こうであるべきだ」といった児童養護施設における保育士のあり方や保育士像を自分なりに構築していく力量として捉えられ、<子どものモデルや見本>、<自立することを考えて接する>、<ルールや規則と子どもの特性を考慮した支援の調整>、<勉強し続ける・現場にいかせる>力量から構成されている。

具体的に、まず、<子どものモデルや見本>の力量は、児童養護施設の保育士は「親の代わり」としての「特定の大人(保育士)」になることを意識した上で子どもと接することである。つまり、「児童養護施設の保育士としての言動」を構築していくことを意味する。

また、<自立することを考えて接する>力量は、児童養護施設の子どもたちは原則18歳に施

設から退所し、「団体生活」からいきなり「一人の生活」となる。そのため、日々の「日常」の「生活」支援において「一つでも一人でできるように「自立」を考えて」接することを意識する。つまり、フォーマルな枠組みの中から個々人のためのインフォーマルなアプローチを意識して子どもと接することを意味する。

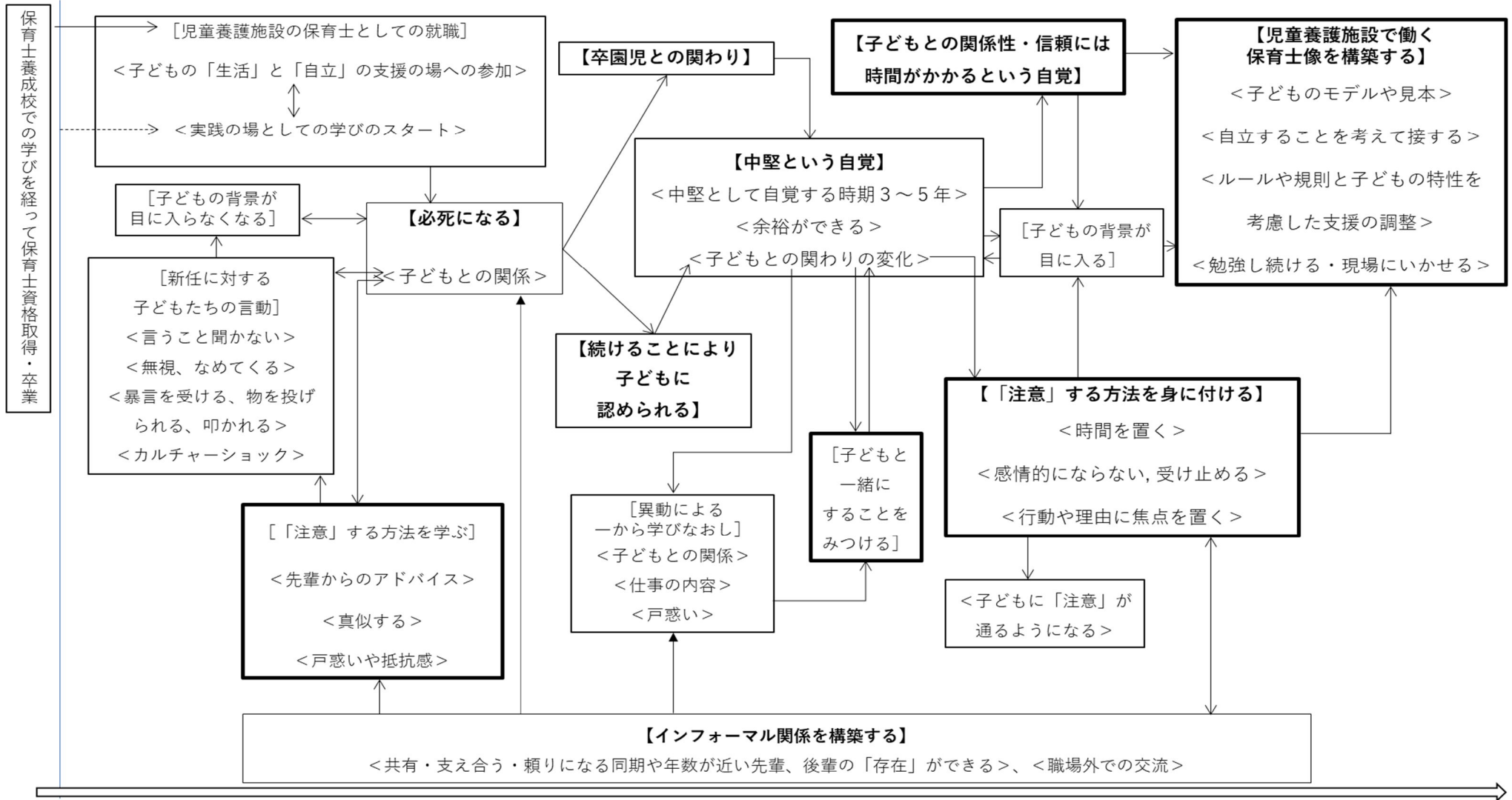
そして、＜ルールや規則と子どもの特性を考慮した支援の調整＞の力量は、新任の際には、団体生活において「いかに子どもを日課にのせられるのか」を考えて接したが、現在に至ることにより、＜ルールや規則＞を守ることも大事だが、＜子どもの特性を考慮した支援＞をすることも大事であることを意識して接することを意味する。つまり、＜ルールや規則と子どもの特性を考慮した支援＞において＜調整＞が大事であることを意識して子どもの特性や状況を判断し、それに合う言動が保育士には求められることを意識するようになる。

最後に、＜勉強し続ける・現場にいかせる＞力量である。この力量は、「勉強し続けないと子どもの世話ができない」という意識から形成される。つまり、年数が高くなっても＜勉強し続ける・現場にいかせる＞ことが児童養護施設の保育士に求められる力量として捉えられる。また、＜勉強し続ける・現場にいかせる＞ことを意識していることは「実践者」として「これから」も児童養護施設の保育士としての力量が新たに形成されていくことも意味する。

そして、子どもとの関わりにおいて保育士の経験と力量形成の一連のプロセスを支えたのは【インフォーマル関係を構築する】ことが挙げられる。これは、新任の際の【必死になる】ことや中堅の際の[異動による一から学びなおし]を支え、乗り越えていた大事な要因として注目できる。

本研究の研究成果は、崔敏奎「児童養護施設における保育士の力量形成のプロセス」、旭川市立大学短期大学部紀要(1), pp-19-54, 2024年3月.にまとめている。

図1 児童養護施設における保育士の力量形成過程の構造化



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 崔敏奎 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 児童養護施設における保育士の力量形成のプロセス | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 旭川市立大学短期大学部紀要 | 6. 最初と最後の頁 19-54 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 崔敏奎 | 4. 巻 52 |
| 2. 論文標題 児童養護施設における施設職員の専門性に関する先行研究の検討 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 旭川大学短期大学部紀要 | 6. 最初と最後の頁 9-14 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

| |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名 崔敏奎 |
| 2. 発表標題 児童養護施設における保育士の力量形成のプロセス |
| 3. 学会等名 全国子ども家庭福祉学会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 崔敏奎 |
| 2. 発表標題 児童養護施設の保育士の力量形成過程の分析における理論的視角の検討 |
| 3. 学会等名 全国子ども家庭福祉学会 |
| 4. 発表年 2022年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|